

チベット人日本語学習者の日本語学習観

土屋順一（東京外国語大学留学生日本語教育センター）

tsuchiya@tufs.ac.jp

0 はじめに

筆者は科学研究費による「二言語話者による日本語習得の実態に関する研究」の一環でモンゴル語・北京語話者、朝鮮語・北京語話者の日本語学習観について調査したが、チベット語・北京語話者については、資料提供者の数がすくなく、研究成果を発表できなかった。そこで、つづいておこなった「日本語学習者の母語と学習環境が言語能力と学習観に与える影響に関する研究」において、2009年9月に中国青海省で、チベット語を母語とする日本語学習者に対してききとり調査をおこなった。本稿はその報告である。

1 調査の概要

2009年9月20、22、23日の3日間、青海省西寧市青海民族学院外語学院日本語学部所属の日本語専攻のチベット語話者、1年生5名、2年生14名、3年生13名、合計32名に対して、ひとりずつ日本語による面接調査を実施してICレコーダーに録音した。

1.1 資料提供者の母語

32名全員が家庭内でチベット語アムド方言をはなす。この機関に入学してからはじめて日本語を学習しはじめた。初等中等教育を漢族と一緒に北京語でうけたのは、32名のうち7名である。筆者はかれらの北京語の運用能力を評価することができないが、北京語をしらない日本人がよくやる筆談という手段が、かれらとはうまくいかないことがたびたびあり、言語の四技能のうち、「きく」「はなす」能力は相対的にたかく、「よむ」「かく」能力はひくいことがかんがえられる。

1.2 資料提供者の学習環境

日本語学部の学生は、入学にあたって、チベット族と漢族は別枠で選抜され、入学後も日本語は別クラス編成になる。使用教科書・進度・試験はおなじである。教員は、チベット族、漢族、モンゴル族、日本人が両クラスを担当する。

1.3 質問項目

- I 日本語を勉強する時、チベット族と漢族でちがうところは何ですか。
- II 日本語の勉強で一番大変なのは何ですか。

2 結果 質問 I

回答はICレコーダーに録音されたものを文字おこした原文をぬきがきしたものである。学年順にならべてある。

2.1 発音のちがい

- ・ 発音はチベット人の方がいいとおもう。たとえば、「これから」という時、漢族の「レ」と「ラ」の発音はちがう（1年生）。
- ・ チベット語と日本語の発音はにているから、チベット人は日本語の発音が上手。漢族は「ラリルレロ」の発音が変（1年生）。
- ・ 発音はチベット族の方が上手。漢族は「ラリルレロ」の発音がちがう（2年生）。
- ・ 発音は、チベット語で舌をまいてはなすので、漢族より発音がいい（2年生）。
- ・ 発音と発表する時、チベットの学生はちょっといいとおもう（2年生）。
- ・ チベット族の学生の発音はちょっといいとおもう（2年生）。
- ・ 発音はちょっとチベット族の方がいいとおもう（2年生）。
- ・ 漢族が日本語をはなす時、発音はあまり上手ではない（2年生）。
- ・ 日本語の発音がチベット語の発音とちょっとおなじところがある。そしてチベット族の発音がちょっといい（2年生）。
- ・ 私たちは発音がいいとおもう（2年生）。
- ・ チベット族は発音がちょっといい（2年生）。
- ・ 発音は簡単、チベット語と日本語はちょっとおなじだとおもう。発音は大丈夫。漢族よりよくできる（3年生）。
- ・ 発音はチベット族がいい（3年生）。
- ・ チベット族の発音がきれいだとおもう（3年生）。
- ・ チベット族は日本語の発音がちょっときれいだが、漢族は上手ではない（3年生）。
- ・ たとえば「ハ」とか「ラ」の発音はチベット人は上手だとおもう。ほかに「ニャ」とか「ガ」（鼻濁音）とかの時、チベット人は上手だとおもう（3年生）。
- ・ 発音は、チベット人にとってむずかしいことではない。発音はチベット人にとってだいたい大丈夫だとおもう（3年生）。
- ・ チベット族は発音がいい（3年生）。
- ・ 発音は私たちの方が漢族よりきれいだとおもう（3年生）。

2.2 文法のちがい

- ・ 私のおもうのは、チベット語の文法は日本語とちょっとおなじところがおおい。だから、私にとってちょっとまなびやすい（1年生）。
- ・ 文法もチベット語とおなじだから、チベット人は勉強するときおもしろいとおもう（1年生）。
- ・ チベット語と日本語の文法はちょっとにている。にているといっても、あまりにいていないから、わかりにくい（2年生）。
- ・ チベット語と日本語の文法はちょっとにているとおもう。チベット族の方がちょっとできる（3年生）。
- ・ 文法はにているからチベット族の方がちょっとやさしい（3年生）。
- ・ チベット語と日本語の文法はだいたいにているところがある。たとえば「の」と「で」とか、だいたいにているとおもう（3年生）。
- ・ 文法は、チベット語の文法とちょっとおなじだが、勉強したらちょっとむずかしい（3年生）。

- ・ 文法は、前は、チベット語の文法と日本語の文法はだいたいおなじだときいたが、でも、私は自分が勉強して、そんなにやさしいとはおもわない（3年生）。
- ・ チベット族にとって、チベット語の文法と日本語の文法はちょっとにているが上級の日本語になったら、差がおおきくなる。だから、漢族にとってやさしいとおもう。でも、私たちはがんばっている（3年生）。

2.3 学習スタイルのちがい 座学

- ・ 漢族は本をたくさんよむが、チベットの学生は本をよむのがきらい（1年生）。
- ・ 漢族はいつも図書館で勉強している（2年生）。
- ・ 漢族はいつも図書館でよく本をみている。チベット族は時々図書館に行く。勉強がすきじゃないからよくあそぶ（2年生）。
- ・ 漢族の学生は毎日毎日勉強するとおもう。チベット族の学生たちは毎日勉強しないで、時々勉強する（2年生）。
- ・ チベット族はいつもあそんでよく勉強しないから（2年生）。
- ・ チベット族の学生はみんな自分がわからなくてもはなすことが大すき。漢族の学生はあまりすきではない（2年生）。
- ・ 漢族の学生たちは毎日図書館で勉強している。チベット族は先生がおしえたら、しかられたら、図書館へ行って勉強する（3年生）。
- ・ チベット族は勉強する時勉強してほかの時はあそんでいる。漢族はいつも勉強している。それがちがうところだとおもう（3年生）。

2.4 意識のちがい

- ・ チベット族はあまり自覚できない。漢族の学生はみんな毎日努力する（2年生）。
- ・ 漢族の学生は小学校からまじめ（2年生）。
- ・ いつも漢族は勉強する時に努力するから。チベット族の学生はあまり努力しない（2年生）。
- ・ 漢族の日本語の勉強の方法が、日本語を勉強するのが自分のことだとおもっている。でも、チベット族はそんなかんがえがあまりない。先生がこれをやってください、ということだけをやる。だから、漢族とチベット族をくらべると、チベット族はあまりよくない。チベット族は自覚がない（3年生）。
- ・ 漢族はチベット人よりとてもまじめ（3年生）。
- ・ 漢族の学生はチベット人の学生より自覚性がたかい（3年生）。

2.5 学習環境のちがい

- ・ 試験をするとき、漢族の学生はいいとおもう。このような問題は、漢族の学生は、日本語能力試験に文字語彙とか読解とか漢字がたくさんある。だから、理解するのはちょっとやさしいとおもう。チベット族の学生たちにとって、このような問題は、中国語のレベルがまだまだひくいから、理解するとき、むずかしい問題がたくさんでてくる（2年生）。
- ・ 文法とか、試験の時、漢族の学生が一番いいとおもう。文法の説明の時は、中国語で説明したので、チベット族のほとんどの学生は中国語があまりできないから、説明がわからないとおもう。漢字は

ちょっと大変。高校の時、中国語はよく勉強しないので、大学には行って、日本語の文法とか、いろいろな問題を中国語で説明するので、わからない（2年生）。

- なにか文章がかいてある。漢族ならちいさい時から漢字を勉強してきたから、チベット族より漢字が上手。だから、文章の理解力はチベット族より上手。チベット族はちいさいときから、自分の民族学校からきたから、理解力はあまり上手ではない（2年生）。
- 漢族はちいさい時から中国語を母語にして勉強してきたから、日本語を勉強するときに、日本語の中の漢字がちょっとおぼえやすい、大体わかる。チベット族は小学校、中学校で勉強するとき、中国語を小学校6年生から勉強しはじめる。だから、今も中国語はそんなに上手ではない。漢字はあまり意味もわからない。漢族はみるとちょっとわかる。自分は小学校、中学校は漢族の学校にいたので、日本語の単語をおぼえる時ちょっと便利だとおもう（2年生）。
- チベット族の学生より漢族の学生の方が、文法を勉強するのがちょっとはやいとおもう。今のたいていの本が日本語を中国語に訳した本だから、それで、チベット語に訳した本がないので、漢族がちょっと勉強がはやいとおもう（2年生）。
- チベット族は、文法の説明が全部中国語なので、勉強しているとき、理解するのがちょっとむずかしい。漢族はうまくできる。漢族の方が文法がよくできる（2年生）。
- 漢族のクラスの成績は私たちの成績より非常にたかいとおもった。理由は、漢族のクラスは中国語で授業をする。ちいさい時から中国語をはなして、日本語の単語に漢字がたくさんあるから、勉強しやすいとおもう。私たちはクラスの中で、小学校から大学までチベット語ではなしている。中国語はあまりはなしていないから、勉強するときはすこしむずかしいとおもう。漢字を理解するときまちがうところは、たくさんあるとおもう（3年生）。
- 日本語を勉強するとき、はじめに、漢字がわからなければならぬ。日本語の中に、漢字がたくさんあるから。漢族の方がちょっとやさしいとおもう（3年生）。
- 漢族の方が勉強するときに便利だとおもう。全部漢字で、翻訳も中国語だから勉強しやすい。チベット人の方がちょっとむずかしいとおもう（3年生）。
- 漢族にとって自分の母語は中国語で、漢字をいれてつくったものがたくさんある。だから、日本語の単語とか中国語の単語が、ほとんどがにている。意味がだいたいちがうところがあるけれど、ほとんどの漢字のかきかたはおなじだとおもう。だから、これは漢族にとっていいとおもう（3年生）。
- 文法を理解することで全然ちがう。漢族は文法を理解するとき、意味などを漢字でかいているので文法を理解しやすい。チベット族は文法が得意ではない（3年生）。

3 質問Ⅱの結果

日本語の勉強で一番大変なのは何ですか(複数回答)。

文法 20

敬語 6

会話 3

聴解 2

文化 2

作文、読解、擬態語、外来語、数詞、漢字 各1

4 結果の分析

4.1 発音のちがい

チベット族にかぎらず、中国の非漢族日本語学習者は漢族の日本語の発音のわるさをよく指摘する。「どこが変ですか」と質問しても「私たちの発音の方が日本人の発音にちかい」というようなこたえがかえってきて、具体的な項目はよくわからない。音調言語の韻律の影響、有声音無声音と有気音無気音の区別、母音の長短などを総合的にとらえているとおもわれる。また、かれらが指摘するラ行音のちがいというのは、南方方言話者によくみられるナ行音、ラ行音、ダ行音の混同のことではなく、ラ行音の調音が音声的に日本人の発音とちがう、ということである。

別のクラスで日本語を学習している漢族の学生の日本語の発音をきく機会はそれほどおおくはないはずであるにもかかわらず、発音のちがいに関する指摘がおおいのは、チベット族の学生たちが口頭コミュニケーションについて関心をもっていることのあらわれであるとおもわれる。

4.2 文法のちがい

チベット語と日本語の文法がにている、という彼らの指摘は、語順のことをいっているとおもわれる。発音の指摘とはちがって、自分たちの方が漢族よりすぐれている、という指摘ではなく、北京語の学習より日本語の学習の方がとっつきやすい、という意味あいがつよいようである。

文法がにているという指摘にもかかわらず、質問Ⅱでは、文法が一番むずかしい、という回答が圧倒的におおい。それは彼ら自身も指摘しているように、最初はよくても、学習の段階がすすんでいくと、文法理解には媒介言語による説明が必要になるが、チベット語で説明した教科書がない、というところにいきつく。学年があがるにつれて悲観的な回答がでてくるのがそのあらわれである。

4.3 学習スタイル・意識・学習環境のちがい

今回の調査の対象となったチベット族の学習者以外にも約 250 名の日本語学習者におなじような質問をしたが、言語の構造以外のちがいを内省した指摘はほとんどみられない。たいていの日本語学習者は日本語学習における自分の属性の有利（文字においては不利）を盲信しており（その楽観性は言語学習にプラスにはたらくとおもう）（土屋 2006）、今回のチベット族の学習者による指摘はまれな例である。「自覚」という難易度のたかい単語がかれらの口からすらすらとでてきたことにもおどろきを感じた。

チベット族の学習者たちは、まったく構造のちがう未知の言語を学習することの困難よりも前に、都市の文化、学校の文化、一斉授業の文化、座学の文化が、適応のための対策が不十分なまま、外来の管理者によってもちこまれたことによる困難からぬげだせずにいる現状を“自覚”しているとかがえられる。

5 むすび

筆者はモンゴル語やトルコ語を学習した経験があるせいか、ことばの構造をことばの学習効果とむすびつけてかんがえることがおおい。ところが、チベット語（音韻体系＋文法構造）＋漢語の知識＝日本語のはやい習得、というようなたし算がなりたつとはかぎらない。どこで、だれと、どうまなぶかによって、結果はまったくちがうものになるのである。

今回の調査の過程で、青海省のチベット族の日本語学習者は、チベット語北京語バイリンガル状態

の上に日本語をつみあげようとしているのではないし、チベット語の上に北京語、北京語の上に日本語をつみあげようとしているのでもないことが感じられた。チベット族の若者たちは、より簡単に、よりとおくとコミュニケーションするための手段として、数ある言語の中から日本語をえらんだ。その背景には、歴史的・文化的なつながりがあるだろう。しかし、現在の学習環境では、「より簡単に」は日本語を学習できない。それでも、彼らは「よりとおく」をめざすことをあきらめてはならないし、私たち日本人教員は「より簡単に」彼らが学習できるように方策をかんがえる必要を“自覚”しなければならないとおもう。

本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）

「日本語学習者の母語と学習環境が言語能力と学習観に与える影響に関する研究」

（平成 20～22 年度 代表者：土屋順一 課題番号：20520459）の成果の一部である。

参考文献

土屋順一(2006) 「モンゴル語、朝鮮語、北京語話者と二言語話者の日本語学習ビリーフとキーボード誤入力」『日本語教育連絡会議論文集』 vol. 18, pp. 16-21

土屋順一(2010) 「モンゴル国と中国内蒙古自治区のモンゴル人による日本語音韻習得の比較」日本モンゴル学会 2010 年秋季大会口頭発表